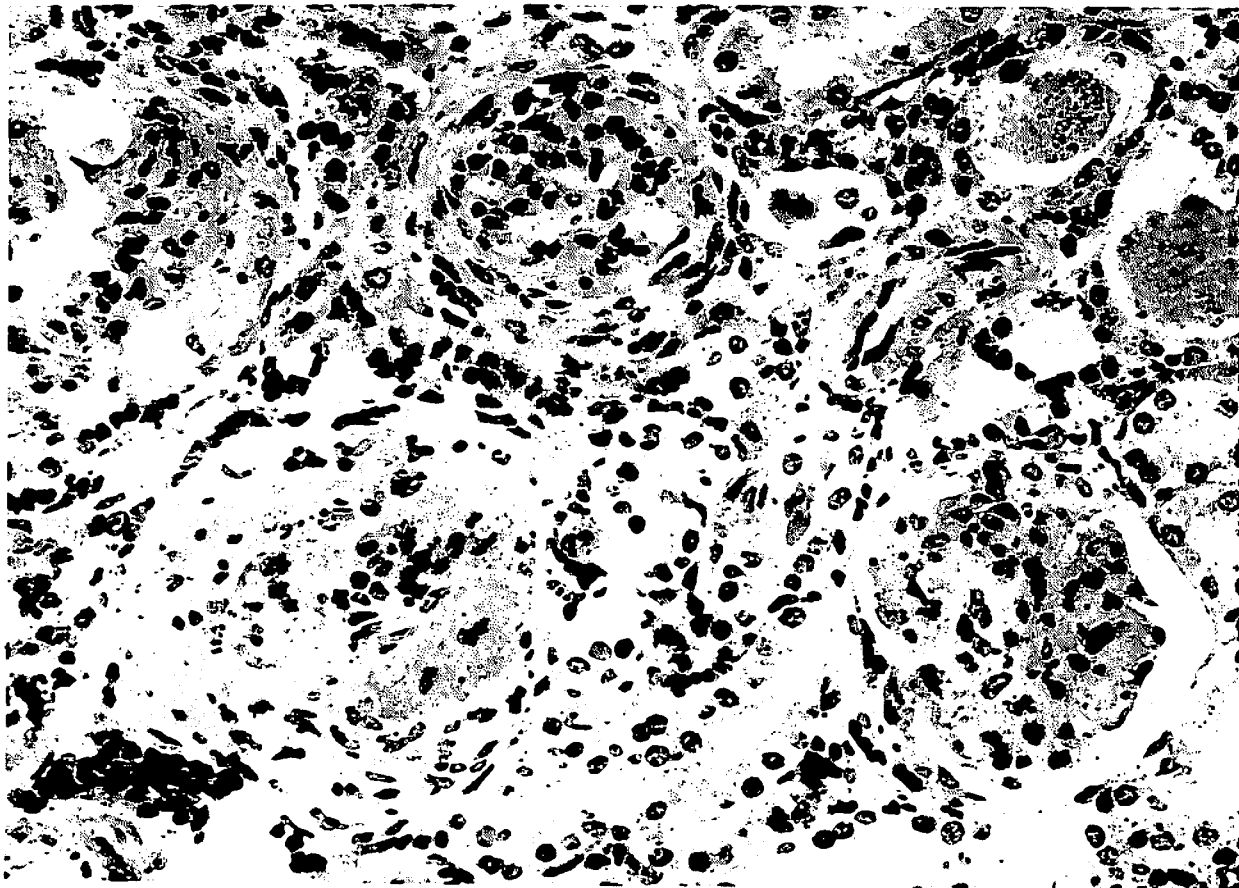


慢性糸球体腎炎および結節性動脈周囲炎

東大・医科研・獣医学研究部出題 第12回獣医病理研修会標本 No.187



いわゆるSPFバリアーで長期飼育されていた無処置ICR（非近交系）雌が13月令で削瘦、衰弱したので屠殺剖検したもの。肉眼的には皮下、腹腔など脂肪少なくゼラチン状、貧血、リンパ節萎縮著明、胸腺退縮、両側腎黄褐色や、萎縮、腸管壁薄く微細出血斑散在などをみとめた。出題標本——腎および副腎——以外にも顕著な変化がみられた。すなわち、各部リンパ節、脾、肝などにヘモジデロシス。脾、リンパ節はリンパ小節萎縮、皮質に多数の核破片が散在、細網細胞増生、形質細胞浸潤、ときにラッセル小体もみられた。脾、リンパ節、顎下腺、回腸、内耳、副腎、腎の中、小動脈一部細動脈では内皮増生、内膜から中膜にかけ類線維素変性、硝子様物質沈着、この部に核破片、好中球散在、外膜周囲に組織球性細胞を主とする細胞繁殖、輪状に格子線維増生がみられた（結節性動脈周囲炎）。

腎は上記の動脈変化に加えて、尿細管硝子滴変性、囊状拡張、尿管柱などがみられたが、病変の主体は写真に

示したような各種の段階の糸球体病変であった。一部の糸球体は核数増加を示したが、大部分は糸球体係蹄の類線維素変性、硝子様物質沈着、核数の減少をみとめ、また半月体形成、ホーマン氏囊肥厚、癒着、さらに癒痕、硝子化を示すものもみられ、糸球体数もや、減少していた。糸球体の基底膜肥厚、mesangium層肥厚がPASおよびPAM染色で明瞭であった。動脈壁、糸球体の硝子様物質の一部はThioflavin Tで黄金色を呈するが、congo red染色でbirefringence陰性、crystal violet染色で異調色を呈さず、アミロイド染色反応は定型的ではなかった。

マウスの糸球体腎炎はNZBおよびそのhybrid、RFなどの系統で報告があり、また、垂直伝播するウイルスとの関係が目されている。また、PNおよびRF系マウスでは結節性動脈周囲炎あるいは壊死性汎動脈炎の自然発生が知られている。現在わが国で広く使われているICR系マウスにも類似の自然例があることを本症例は示している。